

「欧米文化研究」第22号 2015年

メキシコにおける子どもの保護にかんする歴史研究序説

—— 19世紀後半のメキシコ・シティを中心に ——

青 木 利 夫

はじめに

「子ども」をめぐる歴史研究は、とりわけ、フランスの歴史家フィリップ・アリエス（Philippe Ariès）の『＜子供＞の発見—アンシャン・レジーム期の子供と家族生活』（原題 *L'enfant et la vie familiale sous l'Ancien Régime*, 1960）が出版されて以来、世界の多くの地域においてさまざまな成果を蓄積してきた。非西欧地域である日本やメキシコにおいても、子どもを主題とする研究は数多く出されている¹⁾。子どもの歴史といってもその対象とする範囲は非常に広く、子どもにかんする観念、産育や子育て、子どもをめぐる習俗、子どもの生活実態、家族や共同体や国家との関係における子どもの位置づけなど、さまざまな地域や時代を対象に、また、階層やジェンダーなど異なる視角から「子ども」の歴史が論じられてきた。

こうした子どもにたいする歴史的関心が高まった背景のひとつとして、現在、先進国あるいはいわゆる「発展途上国」を問わず、世界の広い地域において子どもがおかれている現状にたいする危機感の高まりがあるように思われる。貧困、食糧危機、紛争、移民や難民などの諸問題は、弱い立場にある子どものいのちをただちに危険にさらす。また、高い乳幼児の死亡率、児童の人身売買、児童労働、児童虐待、児童の性的搾取、ストリート・チルドレン、いじめなどなど、子どもにかかわるさまざまな問題は、世界においてますます深刻さを増している。そして、こうした子どもの危機にたいして、国家や国際機関、民間団体などがさまざまな対応をしているものの、問題の解決にいたるところか状況はさらに複雑になっているといえるだろう。

メキシコは、1994年に OECD に加盟し「先進国」の仲間入りを果たす一方で、圧倒的な貧富の格差が階層や地域のあいだにみられ、多くの子どもたちが、上述したような諸問題にさらされ厳しい生活環境におかれている。こうした状況は、スペインによる植民地支配や独立後の政治経済体制など、さまざまな歴史的背景をもとに生み出されてきたものである。そこで、本稿においては、こうした歴史的背景を踏まえつつ、貧困層の家庭に生まれた子どもたち、親を亡くした孤児や親に見放された捨て子、家庭から離れて暮らす子どもたちなど、いわゆる「恵まれない」子どもたちを対象とし、そのような子どもたちが国家の支配層にどのように認識されたのか、また、子どもたちにたいしてどのような政策がとられたのか、そして、そこにはどのような問題があったのかを検討したい²⁾。なお、対象とする時代は、メキシコの国民国家形成期にあたる19世紀後半を中心とし、地域は子どもの問題がもっとも顕著にあらわれるメキシ

コ・シティを対象とする³⁾。

1 子ども期への着目

メキシコは、1521年にアステカ帝国の崩壊によってスペインの統治下におかれ、その後、300年におよぶ植民地支配を受ける。そして、1810年にはじまる独立戦争をへて、1821年、独立を達成する。独立直後のメキシコでは、1824年に憲法が公布されるなどあらたな国家づくりに向けた改革がはじまるも、国内の権力争いから政権が短期間のうちに交代を繰り返すなど、安定した政治体制を築くにはほど遠い状況にあった。また、アメリカ合州国との戦争での敗北による領土の喪失、対外債務の返済猶予の宣言をきっかけとするスペイン、フランス、イギリスの介入、その後のフランスによるメキシコ・シティの占領など、対外的な危機を数多く経験する。さらに、カトリック教会とのつながりが強く中央集権体制を求める保守派と、地方政府の自治権を重視した連邦制による国家体制を求める自由派との対立が独立当初より続き、19世紀半ばには内戦状態に陥るなど、国内における混乱は続いていた。

19世紀後半に入ると自由派が権力を掌握したのち、1870年代にボルフィリオ・ディアス(Porfirio Díaz 1830-1915)が独裁政権を築くと、外資の積極的な導入による鉄道建設、鉱山開発、農業改革などの政策を打ち出し、国家の近代化を推進する。その結果、19世紀末には、破綻していた国家財政が黒字へと転換した。こうした「政治的安定」と「経済的発展」を背景に、ディアス政権は、欧米諸国に匹敵する強固な国民国家の形成に向けた政策を展開する。そのひとつが公教育の普及であった。メキシコでは、独立直後から公教育の権限は州や市などの地方政府が握っていたが、ディアス政権は地方政府との関係を調整しながら、公教育にかんする連邦政府の権限をメキシコ全土に拡大しようと試みる(青木 2015: 第4章)。とりわけ、先住民系住民が多く、学校が十分に普及していない農村部への教育の拡大は急務の課題であった。

一方、都市においては、急速に進む工業化によって労働者層が増大するとともに、地方からの移住者の流入によって人口が増加し⁴⁾、その結果、貧困層が拡大するなどの問題に直面する。ディアス政権にとっては、伝染病の蔓延を引き起こす衛生環境の悪化、物乞いや犯罪の増加、アルコール依存や売春の拡大など、都市化にともなう諸問題への対応が、もうひとつの重要な課題となっていた。こうした社会問題のなかで真っ先に犠牲を強いられることになったのが、とりわけ貧困家庭に生まれた子どもたちであったといえるだろう。

世界の多くの地域において、強力な近代国家を形成するため、政府は、農工業など産業の生産性を高め国民経済の発展をめざす。そのためには、優れた労働者あるいは生産者、そして、生産した商品を購入する消費者、さらに、国家に忠誠を誓う愛国心をもった国民を育成してそれを国家のもとに統合することが必要とされた。メキシコにおいては、「国民化」の対象とし

てとくに問題視されたのが、先住民系住民の多い農民層や都市の労働者層であった⁵⁾。とりわけ子どもたちは、「将来の市民」としてこの時代に国家の関心が寄せられるようになるが、なかでも多くの関心が向けられたのが、子どもの教育責任を十分にはたすことができないとみなされた貧困家庭の子どもや身寄りのない子どもたちの問題であった。

これまでメキシコの歴史研究は、政治、経済、社会、教育、文化などさまざまな領域において、そしてさまざまな時代を対象として多くの成果を蓄積してきた。しかしながら、「子ども」に焦点をあてた歴史については比較的研究が少ないといわれている（たとえば、Sánchez Calleja y Salazar Anaya 2013: 13）。教育、家族、女性などとの関連において子どもが論じられることはあるものの、子ども自体に焦点をあてた研究はかならずしも多くはない。しかしながら、1990年代にこのテーマにかんする研究が出はじめると⁶⁾、21世紀に入って子ども史研究への関心は急速に高まっていく。たとえば、国立人類学歴史学研究所（Instituto Nacional de Antropología e Historia: INAH）の歴史研究部が、2001年および2003年に子どもにかんするコロキウムを開催し、その間に子どもをテーマとする研究会を組織している。そして、のちにそのコロキウムをもとにした論集が出版された⁷⁾。また、子どもをめぐる概念・言説・表象、子どもの労働や保護、障害をもった子どもへの対応、児童文学、子ども向け読み物など、子ども自体を対象とした研究がつつぎと出されていく⁸⁾。ただし、教育と関連させた子ども研究と比べ、「虐待、性的搾取、非行、児童労働の搾取、浮浪などに関連するテーマ」は少ないという（Sánchez Calleja 2014: 13）。

上述した子ども史研究の多くは、メキシコが独立したあとの19世紀以降を対象としている。とりわけ、独立後の国内の混乱がある程度収束してきた19世紀後半のディアス独裁政権の時代から、1910年に勃発した革命の時代とその後の国家再建期である20世紀前半までの世紀転換期を対象としたものが多い。いうまでもなく、植民地時代や19世紀前半においては、カトリック教会や民間の慈善団体を中心に、子どもにたいする教育や福祉にかんする事業がおこなわれている。しかし、さきに述べたとおり、独立直後のメキシコは、国内の権力争いや欧米諸国との紛争など国内外の問題を抱え、政治的にも経済的にも困難な状況にあり、少なくとも国家主導による教育や福祉に関連する政策が十分に展開されることはなかった。19世紀前半を対象とした研究が相対的に少ないのは、こうした事情がその理由のひとつであると考えられる。また、19世紀後半には国内の混乱がある程度おさまリ、国家財政が安定へと向かうなかで、国家による統治体制が少しずつ整ってきたため、この時代にたいして関心が集まったということもあろう。

さらに、この時代にさまざまな領域において子どもにたいする見方に変化があらわれてきたということが、とりわけ19世紀後半以降の教育や福祉に関心を集めることにつながっているのではないだろうか。この点について、メキシコの子ども史研究の代表的な歴史家のひとりサン

チェス＝カリエハは、19世紀後半から20世紀前半にかけてのメキシコ・シティにおいて、とりわけ恵まれない子どもたちの保護にかんして一連の変化があったと指摘する（Sánchez Calleja 2014: 9）。また、学齢期の子どもの分類を試みたグランハ＝カストロは、「19世紀最後の三分の一で、メキシコの子どもについての社会的表象において根本的な変化が準備された」とし、おとなの世界の付属物として子どもをとらえるのではなく、子ども自身とその必要性が可視化されるようになったと指摘する（Granja Castro 2012: 145）。そして、その具体的な例として、1889年に開催された第一回国公教育会議（Primer Congreso Nacional de Instrucción Pública）において、6歳から12歳までの子どもにたいする「義務教育」という観念が確立したこと、また、1893年、国立医学学校（Escuela Nacional de Medicina）のなかに小児病科（Clínica de Enfermedades Infantiles）の授業が開設されたことなどをあげている（Granja Castro 2012: 145）。

また、メキシコの教育と医療との関連について研究するカスティーリョ＝トロンコソは、19世紀後半のメキシコ・シティにおける子どもの概念の変化を示すものとして、師範学校の開設、初等教育法の発布、幼稚園の設置、学校衛生関連部局（departamentos de Higiene Escolar）の創設の4点をあげた。そして、「すなわち、19世紀最後の数十年のあいだに、子どもは、個人の発達のもっとも重要な期間として最大の強調と論拠をもって提示された」（Castillo Troncoso 2005: 84）と述べる。さらに、カスティーリョ＝トロンコソの研究のもっとも興味深い点は、「こうした子ども期にたいする関心が、想定される人種の退化（degeneración de la raza）をめぐる進化論的な現状分析によって強化された」（Castillo Troncoso 2005: 84）という指摘であろう。

近代国家を担う愛国心をもった「国民」、経済や社会の発展を担う「生産者」および「消費者」となるべき子どもたち、すなわち「将来の市民」に関心を向けた政治家や専門家たちは、そのなかに、浮浪、非行、病気、障がいなどさまざまな問題を抱えた子どもたちが少なからず存在することに大いなる懸念を抱いた。メキシコ国家の発展を担うはずの「将来の市民」にさまざまな問題があれば、それは「メキシコ民族」の「退化」につながることになり、国家の発展どころか退廃に向かうことになる。国家の支配層や専門家たちは、子どもの問題を「国民生活の諸問題のなかの優先課題としてとらえはじめた」のである（Castillo Troncoso 2005: 91-92）。こうして、19世紀後半から20世紀前半にかけて、子どもに関連するさまざまな調査・研究がなされ、また、子どもの問題を解決するための施策が国家主導によってなされるようになったのである。

2 欧米の諸科学とメキシコの子ども

子どもをめぐる諸問題の原因をさぐりそれを解決するために、メキシコにおいても、19世紀から欧米諸国で発達してきた医学や心理学や教育学などの学問や、実証主義や社会進化論など

の思想が参照された。19世紀最後の四半世紀を支配したディアス政権は、海外からの投資をメキシコに呼び込んだだけでなく、思想や学問も、とりわけ西欧諸国から積極的に導入したのである。ディアス政権を支えたごく一部のエリート層はシエンティフィコス（científicos 科学者たち）と呼ばれ、オーギュスト・コント（Auguste Comte）の実証主義やハーバート・スペンサー（Herbert Spencer）の社会進化論などの西欧の思想や学問に影響を受け、「秩序と進歩（Orden y progreso）」というスローガンのもとに「西欧」をモデルとしたメキシコの近代化を進める。ディアスをはじめヨーロッパの末裔を自任する当時のエリート層にとって、西欧諸国に比べて遅れた発展段階にあると考えられたメキシコ社会をいかに西欧諸国のような「文明国」にするか、それが重大な関心事であった。

しかしながら、順調な経済成長を遂げる一方で、スペイン語を話すことができず都会の「文明」に接することのない多くの先住民や、文字を読むこともできず貧困に苦しむ都市の労働者層の存在が、メキシコ全体の発展を妨げる要因として認識される。こうしたいわゆる「文明化」されていない先住民や貧困層の問題は、人種の問題として論じられるようになる。なぜならば、当時、フランスの外交官であったアルチュール・ド・ゴビノー（Joseph Arthur Comte de Gobineau）の『人種不平等論』（原題 *Essai sur l'inégalité des races humaines*, 1853-1855）をはじめ、白人を頂点とする人種論がメキシコのほかラテンアメリカ諸国にも大きな影響を与え、有色人種の「劣等性」や白人と有色人種との混血による人種の「退化」が国家全体の退廃を招くという危機感が、支配層に広く共有されていたからである。とりわけメキシコにおいては、先住民および先住民と白人との混血であるメスティーンが人口の多くを占めており、人種の混血がメキシコの発展段階の「遅れ」の要因として問題視されていた（青木 2015: 第1部）。

19世紀後半からはじまる子ども期にたいする認識の変化は、こうした西欧の思想や学問の流入と密接に結びついていった。すなわち、先住民や混血人種の問題と同じく、貧困や病気などの問題を抱えた親から生まれた子ども、アルコール依存者や売春婦のもとに生まれた子ども、あるいは親を亡くしたり親に捨てられたりした子どもなど、いわゆる「健全」ではない家庭や環境のなかで生まれ育った子どもの再生産が、メキシコ国民の「退化」を招くと考えられるようになったのである。

この時期に西欧より導入された医学、教育学、心理学、犯罪学、骨相学、人類学などの諸科学にもとづき、先住民や混血人種が、都市に住む白人層と同じ「文化」を受け入れ「文明化」されうるのかという議論がなされるようになるが、それは、「健全」ではない家庭に生まれた子どもたちをめぐっても同様であった。そのさい、小児医学の発展に象徴されるように、子どもにはおとなとは異なるその時期特有の特徴があり、前者にかんする問題は、後者とは違った方法で、そして、成人するまえの対処によって解決されることが必要であると認識されていた。

メキシコにおける児童労働の歴史を研究するソセンスキは、20世紀はじめにとくに高まってくる子どもにたいする科学的関心についてつぎのように述べる。

20世紀はじめ、教育学、医学、精神医学、精神分析、小児医学の寄与は、子ども期が人間の発達のなかで特別な期間として理解されるための基礎をおくことに貢献した。(中略) 子どもたちが、小さなおとなではなく、(おとなとは違う) 特異な主体として考えられるようになると、子どもたちのための特定の政策を定め、社会のなかで占める位置を決めることが必要であった (Sosenski 2010: 37、括弧内引用者)。

子ども期を特別な期間とみるこうした認識は、「子どもの世紀」と呼ばれるようになった20世紀に入っていっそう明確になる。メキシコにおいてもまた、子どもをめぐる問題は、上述のような「科学的知」や子どもにたいする特別な配慮の必要性を唱える思想にもとづいて論じられるようになったのである。

19世紀後半のメキシコは、さきに述べたように、「政治的安定」と「経済的発展」がもたらされた一方で、貧富の格差の拡大、産業化にともなう人口流入による都市の膨張、過酷な環境におかれた労働者による労働争議や先住民反乱の多発など、さまざまな社会問題が引き起こされた時代でもあった。とりわけ都市における貧困者の居住地域の拡大は、為政者にとっては社会の不安定要因として問題視されるようになる。そうした問題のなかで、子どもの高い死亡率や⁹⁾、家庭を離れて街を徘徊し、ときには非行に走る子どもたちの存在が、社会に不安をもたらす現実的な問題として認識され、その結果、欧米から導入された「科学的知」による子どもの分析が要請されたのである。

この点について、1990年代に子どもに焦点をあてた研究を出版したアルクビエレとカレーニョ＝キングは、貧しい子どもたちが、伝染病の感染や道徳の悪化の中心であり、それが社会の恒常的な懸念要因となっており、潜在的な危険と考えられていたと指摘する (Alcubierre y Carreño King 1996: 67-68)。また、さきに引用したサンチェス＝カリエハは、社会に不安をもたらす子どもにかんしてつぎのように述べる。

浮浪、極貧、犯罪行為の前兆と考えられる活動である「危険な労働」のもとにある年少者の一部分、「貧しい子どもたち」は、当局と慈善家の懸念の対象であった。馴致あるいは「洗練さ」に欠けているため、「野蛮」や「粗野」としてみられるのが年少者であった。それゆえに、社会の「危険」と考えられた。その時代、浮浪と極貧は犯罪とされていたのである (Sánchez Calleja 2014: 9)。

近代化政策の推進によって変容するメキシコ社会においては、植民地時代から「洗練さ」に欠け「野蛮」や「粗野」とみられていた先住民と同じく、「貧しい子どもたち」は、社会の発展を阻害する「危険要素」とされた。そして、その子どもたちにたいして、近代国家の建設を

めざすディアス政権とその後の革命政権は、医療や教育などさまざまな施策を試みることとなった。

いうまでもなく、子どもたちを「危険要素」としてみなすだけではなく、「恵まれない」子どもたちの「保護」の必要性もまた、植民地時代そして独立期をとおして認識されてきた。19世紀から20世紀の世紀転換期の教育史を研究するガルバン＝ラファルガは、1865年には、「浮浪を矯正するための法律（Ley para corregir la vagancia）」が制定され、子どもの保護にたいする関心が高まり、1870年代からは子どもを守ることへの懸念が報道にもみられるようになったと指摘する（Galván Lafarga 2008: 169）。しかしながら、そうした子どもの「保護」は、純粹に人道的な側面からおこなわれていただけではないだろう。そこで次章においては、19世紀後半から20世紀にかけて、「危険な子どもたち」、「保護を必要とする子どもたち」を社会へと統合すべくどのような制度が構築されようとしたのかを概観したい。

3 社会福祉と社会統制

子どもにたいする視線の変化が19世紀末から20世紀にかけて起こったとはいえ、先述のとおり、植民地時代および独立後のメキシコにおいて、「恵まれない」子どもにたいする関心がなかったわけではない。植民地時代は、スペイン王室の支配のもと副王領として統治されるなかで、子どもの救済や保護にかんする活動の中心的な担い手はカトリック教会そして篤志家による慈善団体であった。独立直後においては、国内外の政治的な混乱が続く財政が逼迫するなかで、国家が子どもの保護に力を注ぐだけの余裕はなく、引き続き宗教および民間の団体が中心となってそれを担っていた。独立以後の小児医学の歴史を概説するアビラ＝シスネロスとフレンクは、1810年から1860年のあいだは、少なくとも国家による子どもの医療について「意味のあるものはほとんどないか、まったくない」と論じている（Ávila Cisneros y Frenk 1997: 333）。

多くの研究は、社会福祉にかんするひとつの転機を、19世紀半ば、保守派の勢力を抑えて政権をとった自由派のベニート・ファレス（Benito Juárez 1806-1872）の時期にみる。ファレスは、植民地時代以降、メキシコにおいて強大な権力をもってきたカトリック教会の莫大な財産を国家の管理下に収める。その結果、1861年に、それまでは教会が管理運営していた病院や救貧院など社会福祉に関連する施設は国家の所属となった。さらに、ファレス政権は、社会福祉を担当する政府機関として、公共福祉局（Dirección General de Beneficencia Pública）を創設し、国家が社会福祉の分野において主導権を握るという姿勢を示した。

こうした社会福祉のいわゆる「世俗化」は、貧困や病気、障がいなどによって支援を必要とする人びとへの対応を、教会権力あるいは宗教家の手ではなく国家の手によっておこなうということを意味していた。すなわち、いわゆる社会的「弱者」の保護にかんする取り組みが、宗

教団体などが担う慈善事業 (caridad) から、国家が責任をもっておこなう公共福祉 (beneficencia pública) へと転換する第一歩となったという側面がある (Secretaría de Salud 1993: 17)。それゆえに、この時代を社会福祉の歴史における転機とみなすことも可能かもしれない¹⁰⁾。しかしながら、国家の社会福祉にたいする役割について、政策を策定し実行する役割を担った国家の側において明確な意義づけがなされていたのだろうか。あるいは、国家が社会福祉に責任をもつことのできるしくみが整っていたのであろうか。

植民地時代に設立されたメキシコ・シティの救貧院 (Hospicio de Pobres) を研究するアロムは、ファレスによる社会福祉の「世俗化」が、メキシコにおける社会福祉政策の歴史的転換の第一歩であることを認めながらも、ファレスをはじめ当時の政策担当者のあいだで、慈善事業と公共福祉の概念が混在していたと指摘する。さらに、財政の逼迫や人材不足などの問題を抱え、国家が責任をもつて公共福祉政策を実施することは実質的にはなかったことを明らかにした (Arrom 2011: 304-314)。たとえば、子どもの保護にかかわる重要な施設として1861年に「母子病院 (Hospital de Maternidad e Infancia)」が設置されるものの、それもまもなく閉鎖される。また、ファレス政権下で設置された公共福祉局も、短期間のうちに廃止されている。それゆえに国家主導による社会福祉政策の成果は、かなり限られたものであったといえるだろう。

1863年、メキシコ・シティを占領したフランスによって送り込まれたハプスブルグ家のマキシミリアーノ (Maximiliano) 皇帝とその妻カルロータ (Carlota) は、社会福祉にも積極的に関与した。たとえば1865年、「母子福祉審議会 (Consejo General de Beneficencia Materno-infantil)」が組織され、翌年、「母子の家 (Casa de Maternidad e Infancia)」が設置される (Gómez 1997: 311)。しかし、マキシミリアーノ政権は3年という短命に終わっており、社会福祉施設は資金不足や運営上の混乱から悲惨な状況におかれていたといわれる (Sánchez Calleja 2014: 71)。マキシミリアーノが処刑されると、ふたたび支配権を掌握したファレスは、「母子病院 (Hospital de Maternidad e Infancia)」を再建する。こうした施設は市によって運営されていたが、頻繁におこなわれる担当者の交代や制度の変更、市政府がおこなう任務の多様性などさまざまな理由から、福祉にかんする政策が十分に展開されることはなかった (Secretaría de Salud 1993: 17)。

このように1861年以降、マキシミリアーノ帝政期をはさむ自由派政権のもとで進められた社会的「弱者」の救済事業は、政策担当者の意識や経験の欠如、財政難や専門の人材の不足などさまざまな問題から、かならずしも満足のいくような成果をあげたとはいえない。しかしながら、植民地時代から続く病院や救貧院などの施設をつうじておこなわれるこうした事業を、少なくとも制度上は、教会権力から切り離し国家の管理下で推進しようとする試みがはじまったということはいえるだろう。実際のところは、教会や民間団体の支援を受けたり (Alcubierre

y Carreño King 1996: 51)、福祉施設を民間の慈善団体に任せるべきという批判があったりしたもの（Sánchez Calleja 2014: 71-72）、いずれにしても、この時代から、福祉事業をつうじて国家権力が貧困層を含めた全国民へとその支配力を拡大するしくみが少しずつつくられていったのである。

その後、ディアスの実質的な支配下において、1877年、公共福祉局（Dirección de la Beneficencia Pública）が再び設置されて、社会福祉に関連する施設は、市政府から連邦政府の管轄へと移行することになる。そして、1881年、この部局の執行部が廃止されて各施設の管理運営が内務省（Secretaría de Gobernación）のもとにおかれ、公共福祉政策における連邦政府の権限が強化されることになった。そして、社会福祉関連の施設は、病院、救貧院、教育矯正施設の三つに分類された（Secretaría de Salud 1993: 18-19）¹¹⁾。すなわち、これらの施設に収容されるものたちについては、病気の治療や保健衛生の管理、貧困者の救済と支援、非行年少者や障がい者、身寄りのない子どもの社会化という三つの観点から対処がなされるということになる。ここで注目すべきは、これらの施設が内務省の管轄になったということである¹²⁾。それは、これらの施設に収容されているものの対処は、社会的「弱者」の公的な保護あるいは救済という福祉の視点よりもむしろ、社会の安定化つまり社会統制という視点からおこなわれるということを意味しているのではないだろうか¹³⁾。

国家主導の公共福祉政策が社会統制という側面をもつならば、実際の政策の策定やその実施にあたっては、上述の三つの観点は密接に結びつく。とりわけ子どもに焦点をあてた場合、「保健衛生」と「社会化」あるいは「教育」との結びつきが注目されるようになる。すなわち、教育学の知見と保健衛生にかかわる医学的知見とが結びつくことによって、子どもたちの心身の発達の問題が、社会統制という問題を背景に、教育学だけではなく医学の視点からも検討されるようになったのである。その象徴的な取り組みが、1882年に「保健上級審議会（Consejo Superior de Salubridad）」によって開催された「教育衛生会議（Congreso Higiénico Pedagógico）」であった。

この会議においては、校舎の建設や満たされるべき衛生状態、伝染病の感染防止などについての提案がなされたが、それがただちに実行に移されることはなかったといわれる（Secretaría de Salud 1993: 21）。しかし、この会議について、医学と教育学の結びつきに注目するカスティージョ＝トロンコソは、実際の成果よりも、この会議において医者と教育者が議論をかわし、衛生と学校とが結びついたことが重要であると述べる。そして20世紀に入り、教室が子どもたちの心と体を調査対象として、医学的、教育学の視点から検査がおこなわれる実験室となったことの問題を指摘する（Castillo Troncoso 2005: 88-89）。

19世紀後半以降、「学校衛生 (higiene escolar)」の重要性が認識され、その具体的な施策が模索されはじめる。20世紀に入ると、救貧院や矯正施設に設置された学校において、病気や障がいをもつ子ども、不品行の子どもなど問題があるとされた子どもたちを対象に、身体の測定や医学的、心理学的な検査が実施され、その検査の記録が蓄積されていく¹⁴⁾。その結果、「科学的」な知見によって、「異常」な子どもが特定されることになった。そして、その「異常」な子どもたち、すなわち「危険な子どもたち」のもつ問題の原因を解明し、それを統制していくことに関心が注がれるようになったのである。

むすびにかえて

30年あまり続いてきたディアスの独裁体制は、1910年にはじまる革命によって崩壊し、ディアスは翌年に亡命する。その後、10年におよぶ内乱の時代をへたのち、1920年からメキシコは国家の再建期に入る。その後の革命政権がとくに重視した政策が、先住民系住民が多く居住する農村地域への学校教育の拡大であった。その根底には、歴史的、地理的条件によって社会的、文化的に「遅れた」発展段階にある先住民たちに教育を与えることでメキシコ社会の発展を担う「国民」を育成するという革命政権の思惑があった（青木 2015: 第2部）。

しかし、その一方で、先住民は生物学的に「劣等」であるという人種主義が完全に払拭されることなく、先住民が教育を受けることで「文明化」されうるのかどうか、それを疑問視するような19世紀的な視線も引き継がれてきた。そうした視線は、19世紀に誕生してきた欧米の諸科学によって支えられていた。そして、1935年に「人種改良のためのメキシコ優生学学会 (Sociedad Eugénica Mexicana para el Mejoramiento de la Raza)」が設立されたことにみられるように、遺伝という観点から人種の「改良」をめざそうとする流れにつながっていく。

このような動きは、先住民だけではなく、「恵まれない」子どもたちにたいしても向けられることになる。前章の最後に述べたように、20世紀には、本来、そうした子どもたちを保護し教育するための施設において、問題をもつとされる子どもたちにたいして身体検査や精神測定がおこなわれたのである。そこで「異常」と判断された子どもたちには、はたしてどのような対応がなされたのであろうか。今後は、こうした施設に収容された子どもたちの実態について、具体的に検討していくことが課題となる。また、施設に収容されることなく、路上で暮らし、あるいはおとなとともに働く子どもたちは、どのような状況のなかで生きてきたのか、そうした子どもたちの歴史についても今後の課題としたい。

注

- 1) 日本内外における子ども史研究については、岩下によるコラム（岩下誠「福祉国家・戦争・グローバル化—1990年代以降の子ども史研究を再考する」橋本伸也・沢山美果子編（2014）『保護と遺棄の子ども史』昭和堂）を参照のこと。
- 2) 日本におけるメキシコの子どもをめぐる研究は、現在のところごくわずかしかないが、数少ない研究として以下のようなものがある。落合一泰（1984）「メキシコの子どもたち—社会文化的背景の普遍性と多様性」加藤秀俊編（1984）『世界の子どもたち—比較子ども学』チャイルド本社、Hasegawa Nina (2004), “Los niños ricos de México en el siglo XIX: testimonio de seis autores de la época 十九世紀メキシコにおける裕福な子ども像—当時の著者六人の記述より” 上智大学『外国語学部紀要』第39号、Hasegawa Nina (2005), “Imagen del niño y la niña ideales en la publicación infantil mexicana: *El Correo de los niños* (1872-1879) メキシコにおける子供の理想像—児童向け週刊誌 ‘El Correo de los niños’ (1872-1879) を通して” 上智大学『外国語学部紀要』第40号がある。本稿は、こうした日本におけるメキシコ史研究の状況に鑑み、メキシコの子どもをめぐる歴史の全体構造の解明に向けたささやかな第一歩としたい。
- 3) サンチェス＝カリェハは、「メキシコ・シティは、『不品行の』、あるいは危険にさらされている年少者を統制するための子どもの政策が展開された舞台であった。その政策は、首都にある社会的施設によって実践に移された」と述べる（Sánchez Calleja 2014: 9）。
- 4) 1867年から1911年のあいだに、メキシコ・シティの人口は23万人から47万人に増加した（Castillo Troncoso 2006: 26）。
- 5) 農村地域の住民の「国民化」については、これまでに農村教育あるいは先住民教育に焦点をあてて論じたことがある（青木 2015: 第2部）。
- 6) 引用・参考文献一覧にあげた、Secretaría de Salud (1993), Alcubierre y Cerreño King (1996) のほかに、Larvin, Asunción (1994) “La niñez en México e Hispanoamérica: rutas de exploración”, en Gonzalbo Aizpuru, Pilar y Cecilia Rabell (1994), *La familia en el mundo iberoamericano*, México, UNAM, Rodríguez, Gina (1996) *Niños trabajadores mexicanos, 1865-1925*, México, INAH/ UNICEF などがある。
- 7) ふたつのコロキアムはそれぞれ、「子ども—歴史のなかの像（Los niños: su imagen en la historia）」（2001年）、「子ども—規範と違反（Los niños: normas y transgresiones）」（2003年）と題しておこなわれた。また論集は、Sánchez Calleja, María Eugenia y Delia Salazar Anaya (2006) *Los niños: su imagen en la historia*, México, INAH, Salazar Anaya, Delia y María Eugenia Sánchez Calleja (2008) *Niños y adolescentes: normas y transgresiones en México, siglos XVII al XX*, México, INAH として出版された。
- 8) Castillo Troncoso (2006)、Herrera Feria (2007)、Meyer (2007)、Padilla Arroyo et al. (2008)、Alcubierre Moya (2010)、Sosenski (2010)、Sosenski y Jackson Albarrán (coords.) (2012)、Padilla Arroyo (coord.) (2012)、Sánchez Calleja y Salazar Anaya (2013)、Sánchez Calleja (2014) など、21世紀に入って多くの子どもにかんする研究が出版されている。
- 9) ソレール＝ドゥランは、ディアス政権下のマクロレベルの経済成長と対比して、子どもの罹患率、

死亡率の高さを指摘し、とりわけ農民や労働者の子どもたちへの支援がなく、逆に子どもたちが労働力として利用されていたことを批判する (Soler Durán 2008: 111-114)。

- 10) ただし、社会的「弱者」、とりわけここでは、「危険な子どもたち」あるいは「保護を必要とする子どもたち」の歴史は、慈善事業から公共福祉への転換という視点だけではその全体を明らかにすることはできない。この点について、「保護と遺棄の子ども史」の可能性を論じる沢山は、「保護と遺棄」の全体構造、歴史的変遷を明らかにする視点と枠組みについてつぎのように指摘する。

「保護と遺棄」という視点は、近世から近代への展開をめぐって、(中略) 日本であれば近世の町、村による捨て子養育から近代的施設での棄児養育へ、ヨーロッパであれば教会などによる捨て子院から近代国家による近代的児童保護へという、前近代と近代の断絶のみでは捉えられないことを浮かびあがらせる (沢山 2014: 39-40)。

そして、「子どもの保護の場であり、いのちを繋ぐ場としての家族」、「子どもの置かれた位置の社会的経済的背景、とりわけ児童労働のあり様」、「子どものいのちをめぐる心性」、これら「三つの位相の歴史的変化を架橋する」ことが必要であると述べる (沢山 2014: 40)。本稿においては、こうした指摘を念頭に置きつつ、メキシコにおける子ども史の全体構造を明らかにするための第一歩として、さしあたり、「子ども」にたいする国家あるいは支配層の視線、および、子どもを保護するしくみとその問題点に焦点をあてて検討する。

- 11) これらの社会福祉施設のうち、子どもに関連するものとしては、出産にかかわる「産院 (Hospital de Maternidad)」、子どもたちの病気に対応する「子ども病院 (Hospital de Infancia)」、老人に宿泊所と食料を与えるほか、子どもに保護と教育を与える「救貧院 (Hospicio de Pobres)」、孤児に初等教育と職業訓練をおこなう孤児工業学校 (Escuela Industrial de Huérfano)」などがある (Secretaría de Salud 1993: 18-19)。
- 12) 内務省の管轄となった病院が対応する患者は、急性あるいは外科処置の必要がある病気の患者、梅毒患者、ハンセン病患者、心神喪失患者、受刑者などであった (Secretaría de Salud 1993: 18-19)。
- 13) この点について、ディアス期のメキシコ・シティの貧困対策を研究するロレンソ＝リオは、「貧困者の教育と被収容者および彼らを収容している組織の『健全化 (saneamiento)』は、疑いもなく、実際に応用される秩序と社会統制のふたつの措置であった」(Lorenzo Río 2011: 77) と述べて、社会的「弱者」の保護が、社会の統制という側面をもっていたことを指摘する。
- 14) カスティーリョ＝トロコンソは、ディアス政権下においておこなわれた子どもの人体測定検査の記録にかんして、写真の技術の発展によって写真入りの記録表が数多く作成されたことに注目する (Castillo Troncoso 2005)。

引用・参考文献

- Alcubierre Moya, Beatriz (2010) *Ciudadanos del futuro: Una historia de las publicaciones para niños en el siglo XIX mexicano*, México, El Colegio de México/ Universidad Autónoma de Estado de Morelos.
- Alcubierre, Beatriz y Tania Carreño King (1996) *Los niños villistas: una mirada a la historia de la*

infancia en México, México, INEHRM.

- Alanís, Mercedes (2010) “La asistencia infantil en México: Recuento de una historia que aún no termina”, en Briseño, Lilian y Susana Chacón (coords.) (2010) *Ideas y afanes de una patria: México en el Bicentenario*, México, Editorial Porrúa/ Instituto Tecnológico de Monterrey.
- Arrom, Silvia Marina (2011) *Para contener al pueblo: el Hospicio de Pobres de la ciudad de México (1774–1871)*, México, CIESAS (Servando Ortoll trad., *Containing the Poor: The Mexico City Poor House, 1774–1871*, Durham, Duke University Press, 2000).
- Ávila Cisneros, Ignacio y Silvestre Frenk (1997) “Apuntes para la historia de la pediatría en México desde la Independencia hasta nuestros días”, en Ávila Cisneros, Ignacio, Francisco Padrón Puyou, Silvestre Frenk y Mario Rodríguez Pinto (1997) *Historia de la pediatría en México*, México, FCE.
- Castillo Troncoso, Alberto del (2005) “Médicos y pedagogos frente a la degeneración racial: la niñez en la ciudad de México, 1876–1911”, en Agostoni, Claudia y Elisa Speckman Guerra (eds.) (2005) *De normas y transgresiones: enfermedades y crimen en América Latina 1850–1950*, México, UNAM.
- Castillo Troncoso, Alberto del (2006) *Conceptos, imágenes y representaciones de la niñez en la Ciudad de México*, México, El Colegio de México.
- Galván Lafarga, Luz Elena (2008) “La niñez desvalida: El discurso de la prensa infantil del siglo XIX”, en Padilla Arroyo et al. (coords.) (2008).
- Gómez, Federico (1997) “La atención al niño enfermo a partir de la Independencia”, en Ávila Cisneros, Ignacio, Francisco Padrón Puyou, Silvestre Frenk y Mario Rodríguez Pinto (1997) *Historia de la pediatría en México*, México, FCE.
- Granja Castro, Josefina (2012) “Contar y clasificar a la infancia: las categorías de la escolarización en las escuelas primarias de la ciudad de México, 1870–1930”, en Padilla Arroyo (coord.) (2012).
- Herrera Feria, María de Loudres (2007) *Estudios sociales sobre la infancia en México*, México, Benemérita Universidad Autónoma de Puebla.
- Lorenzo Río, María Dolores (2011) *El Estado como benefactor: Los pobres y la asistencia pública en la Ciudad de México*, México, El Colegio de México/ El Colegio Mexiquense.
- Meyer, Eugenia (2007) *Niños de ayer, niños de hoy*, México, CONACULTA.
- Padilla Arroyo, Antonio (coord.) (2012) *Arquetipos, memorias y narrativas en el espejo: Infancia anormal y educación especial en los siglos XIX y XX*, México, Universidad Autónoma del Estado de Morelos/ Juan Pablos Editor.
- Padilla Arroyo, Antonio et al. (coords.) (2008) *La infancia en los siglos XIX y XX: discursos, espacios y prácticas*, México, Casa Juan Pablos/ Universidad Autónoma de Estado de Morelos.
- Sánchez Calleja, María Eugenia (2014) *Niños y adolescentes en abandono moral. Ciudad de México (1864–1926)*, México, INAH.
- Sánchez Calleja, María Eugenia y Delia Salazar Anaya (coords.) (2013) *Los niños: el hogar y la calle*,

青木利夫

México, INAH.

Secretaría de Salud (1993) *La atención materno infantil: apuntes para su historia*, México, Secretaría de Salud.

Soler Durán, Alcira (2008) “Infancia y exclusión en el México porfirista en los estados de Chiapas y Oaxaca”, en Padilla Arroyo et al. (coords.) (2008).

Sosenski, Susana (2010) *Niños en acción: el trabajo infantil en la ciudad de México 1920-1934*, México, El Colegio de México.

Sosenski, Susana y Elena Jackson Albarrán (coords.) (2012) *Nuevas miradas a la historia de la infancia en América Latina*, México, UNAM.

青木利夫 (2015) 『20世紀メキシコにおける農村教育の社会史—農村学校をめぐる国家と教師と共同体』 溪水社。

沢山美果子 (2014) 「保護と遺棄の問題水域と可能性」 橋本伸也・沢山美果子編 (2014) 『保護と遺棄の子ども史』 昭和堂。

追記) 本稿は、日本学術振興会科学研究費助成事業 (学術研究助成基金助成金) (基盤研究 (C)、課題番号15K04362、研究代表・青木利夫、研究課題「メキシコにおける子どもの福祉と教育に関する研究」) の助成による研究成果の一部である。

Introducción del estudio histórico sobre la protección de la infancia en México: La Ciudad de México en la segunda mitad del siglo XIX

AOKI Toshio

Referente a la historia sobre la infancia en México, relativamente no hay muchos estudios, si se comparan con los estudios históricos sobre otros temas, por ejemplo: el político, el económico, el social, el cultural y el educativo. Sin embargo, desde finales del siglo pasado hasta la fecha se han reunido varios estudios sobre la historia de la infancia enfocando los conceptos, los discursos y las representaciones de la niñez, los trabajos infantiles y la protección de los niños, la literatura y lecturas infantiles etc. Muchos de estos estudios tratan de la segunda mitad del siglo XIX hasta la primera del siglo XX.

A partir de la década de 1870 bajo la dictadura del presidente Porfirio Díaz, se estabilizó la situación política y la economía mexicana se desarrolló con varias políticas económicas de modernización. Mientras tanto, surgieron varios problemas sociales con la urbanización y la industrialización, tales como la expansión de la pobreza, el empeoramiento del ambiente higiénico y el aumento de delitos, mendicidad, alcoholismo y prostitución, particularmente en las grandes ciudades. En estas circunstancias, más que nadie, los niños, sobre todo los nacidos en las familias indigentes, siempre caían víctimas.

Las clases dominantes del México de esta etapa no se quedaban indiferentes a estas situaciones en que se colocaban los niños vulnerables. Porque se preocupaban mucho por la degeneración de la sociedad mexicana. Y consideraban que para quitar el riesgo de la sociedad, tenían que corregir, educar, es decir, controlar a los niños que andaban por las calles mendigando o volviéndose delincuentes. Se necesitaban políticas hacia los niños vulnerables con el fin de formar “ciudadanos” idóneos para construir un Estado-nación fuerte.

Este trabajo tiene por objeto considerar cómo trataban las clases dominantes a los niños vulnerables, qué instituciones se establecieron y qué problemas tuvieron las políticas en torno a los niños en el México desde la segunda mitad del siglo XIX hasta principios del siglo XX. En Japón casi no existen estudios históricos acerca de dicho tema. En vista de esta situación, este trabajo será un primer paso para aclarar la historia de la infancia en México.